当院におけるエコーガイド下穿刺の教育

守屋直祐（モリヤナオスケ）[1)]、佐藤奏音[1)]、畔上拓巳[1)]、小野里菜[1)]、長崎勇介[1)]、吉田真理[1)]、屋根田裕子[1)]、小桑理香[1)]、原嶋美幸[1)]、横井　良[1)]、武藤かおり[1)]、菊地　勘[2)]
医療法人社団豊済会　下落合クリニック 臨床工学科[1)]、腎臓内科・透析内科[2)]

【はじめに】高齢者や糖尿病の増加に伴い穿刺困難の患者が増加し、エコー下穿刺を行う機会が増えた。当院におけるエコー下穿刺の教育方法について報告する。

【方法】教育開始時に血管の走行や深度、狭窄など、バスキュラーアクセスの状態をエコー画像上で的確に把握できるよう形態評価の重要性を説明する。模擬血管を用いてプローブ操作や血管へのアプローチ方法を学び、その後に血液媒介感染症の予防に対するプローブ管理の学習を行う。患者へ穿刺を行う際は、血管径や走行深度により穿刺血管を選定し、指導者と相談しながら実施者の技術習得度に合わせて難易度を上げて行く。

【結果・考察】形態評価や感染症に対する知識を学習した事、また、模擬血管を用いて基本操作を習得した事により、心理的負荷の少ない状態で患者へのエコー下穿刺に移行する事ができた。指導者と共に穿刺血管を選定するため、技術習得度を見誤ることなく安全にエコー下穿刺を実施する事ができた。

【まとめ】エコー下穿刺の教育の重要性を確認した。